

5—5

1 (白紙)

2 (白紙)

3

一 大廣院様御代元文五年四月從

御国屋敷河村彦十郎様ヲ以

御公儀^江被為遊御達候^ニ付、乍恐私祖父之者共

御公儀^江御訴詔之儀共被為御沙汰候趣

委^者其節祖父之者参府仕候条竹寫渡海之儀

被為仰附候次第、先規より書附之写左之通

御座候、尤右御達之節願書之写如左

伯耆国米子町人

4

大谷九右衛門

乍恐奉願口上之覚

一 竹寫渡海之儀、私先祖之者^江被為仰附候

濫觴^者松平新太郎様因幡伯耆

被為遊御領知候節、元和三年御仕置之為

上使阿倍四郎五郎様御越之刻乍恐

私先祖之者義竹寫渡海仕度之段相窺、翌

元和四年当御地^江先祖之者共相詰御訴詔

5

申上候处、同年五月十六日新太郎様^江以

御奉書願之通渡海可仕之旨被為仰付

則右之御奉書從

新太郎様先祖之者共頂戴仕、就夫

御目見被為仰附冥加至極難有仕合

奉存候、其後毎年渡海仕候处、元録⁽⁴⁻⁴⁾五年

彼島唐人相渡、依之伯耆守様より

御注進被仰上、夫より同六年七年

八年迄段々御差図を以渡海仕候处

6

年々唐人相増候様子^ニ付追々

伯耆守様より御注進被仰上候处、竹嶋

渡海之儀制禁之旨、元録⁽⁴⁾九年

正月廿八日伯耆守様迄以

御奉書被為仰出候段、則從

伯耆守様被仰渡候御事

竹嶋渡海之儀制禁被為仰付候^ニ付、村川市兵衛

7 一

元録⁽⁴⁾年中当御地^江相詰御歎之御訴詔

申上候半^ニ病氣^ニ付先国元^江帰宅仕度之旨

御断申上罷帰候、其節私儀^者幼少、尤困窮

仕候^ニ付右市兵衛と一所^ニ当御地へ相詰候義難相成

乍存其儀無御座候、其後享保九年四月從

当御代様竹寫渡海越方之儀段々

被為遊御尋⁽²⁾候^ニ付、相模守様迄御請書

仕指上候、其節私儀何卒当御地^江相詰御歎

8

之御願申上度所存候御座候得共困窮仕

罷在候故乍残念遲退仕候御事

右之通元和四年より元録⁽⁴⁾四年迄竹寫^江

渡海仕候处、彼島^江唐人相渡候^ニ付渡海

制禁被為仰附候、已後兩人共渡世可仕

様^茂無御座候所、御領主より御憐愍ヲ以先^者

及渴命不申様被仰附置候段、是以

御上之御太恩之筋難有仕合奉存候

9

然^者當時至極困窮及候^ニ付、乍恐以

御慈悲如何様共取続候様被仰附被為下候ハ、

難有仕合可奉存候、全

御上^江奉対私共式之ものケ様之御願

奉申上儀千万恐入奉存候得共

台徳院様

御代元和四年より元録⁽⁴⁾八年迄七拾八年之間

九年ニ老度宛

1
0

公方様^江

御目見被為仰附、御紋之

御時服拝領之仕并道中

御紋之指札蒙御免竹嶋渡海船^江

御紋之船印頂戴仕、且道具蒙

御免元和四年より元^{（マ）}録八年迄及八拾年

毎歳彼嶋^江渡海仕、尤渡海制禁被

仰附候以後今以御領主様より及渴命

1
1

不申様御憐愍之御儀^者是又右書頭候通

重々莫太成奉蒙御恩沢候者之子孫

末々至り至極之及困窮、此上難取続

相成候得^者偏御広恩忘却仕候様^ニも

可相成哉と誠^ニ以不顧恐此度相詰

身命取続仕候様御慈悲之筋乍恐

奉願上候、何卒願之通被為

仰付被下置候得^者難有仕合可奉存候、以上

1
2

伯耆国米子町

大谷九右衛門

元文五年申四月日

寺社御奉行様

御役人中様

右之通御座候

一 右元文五年四月私祖父之者儀

御公儀^江御訴詔之義^者翌年寛保改元

1
3

八月御請披之儀相済候^ニ付、同十二月廿二日從

大廣院様

日光宮様^江為

御使者蓮花寺五郎八様ヲ以其節從

宮様乍恐私祖父儀御頼被為

思召候趣、御請被為仰達候

御口上之写并右従

宮様御頼被為思召之趣御坊官

14

万里小路民部卿様より御宿坊迄被為
仰達候所之御紙上之写如左

護法院 万里小路民部卿

以手紙得御意候、然_{者兼而}

御存被成候通、大谷九右衛門事

京都御外戚清水谷前大納言殿へ

御心安御出入仕候故彼御方より御頼

有之宮様_{江茂}御目見等

15

被仰附候事御坐候、此度九右衛門

御公儀_江ハ願之筋相済国元

伯州米子_江罷帰候由、就夫九右衛門

義米子御城主不相替、只今迄之

通万事御憐愍之御申付被遂候ハ、

宮様御悦可被思召候間、此等之

趣無急度貴院より御檀家

御役人中迄宜御申入可被成候、以上

16

十二月十八日

右之通御座候ニ付、御請御書

之趣如左

従松平相模守殿

宮様_江御請口上之趣

一 此度大谷九右衛門儀

御頼被為遊候趣

承知仕畏奉存候

17

一 九右衛門

御公儀_江御願申上候儀_茂御坐候

此已後右等之相願候得_者

役人共評儀_茂仕可遣之由

此儀_者津田周防より内々_{ニ而}

護法院迄之口上_ニ候

護法院

十二月廿六日

18

大谷九右衛門殿 大西淡路守

以手紙申達候、此間^者御遠々敷
相過申候、又々御病心忤^ニも有之候哉
御本坊^{ニ而}民部卿共わさのミ申
事^ニ候、然^者先頃御内證申入候通
此度御自分事伯州米子之
御城主^江

19

宮様より為御頼則松平相模守殿へ
当月十八日護法院為御使被遣候
依之為御請蓮花寺五郎八^与申仁
登山被申候、追附民部卿より御自分へ
御殿迄参上被致候義可申来候、吉
事候故、拙より先内意申達候委細
之趣御登山之刻面段可申承候、千万難有
御事^ニ可被存候、以上

十二月廿六日

20

大谷九右衛門殿 万里小路民部卿

以手紙申達候、然^者御自分事
松平相模守殿^江御頼之儀宿坊
護法院を以此度被仰入候处、昨日
蓮花寺五郎八^与申仁ヲ以護法院迄
御承知之由御内證御請申来候
因茲右之趣申渡有之候間、今明日中

21

上野御本坊迄可被罷越候
為其如斯候、以上

十二月廿七日

大谷九右衛門殿 牛尾金右衛門
御用之儀有之候間、明十二日四ツ時

御館^江可罷出候、以上

卯月十一日

22

其方儀上野

宮様被為添

御言葉候段被成

御承知候、其旨相心得

可申候

一 右願書之面書頭候通私共先祖之者より、尤
祖父共節迄

23

公方様^江

御目見被為仰附候節

御紋之時服拝領仕候条、尤

太守様^江

御目見之節、先祖之者共儀

御紋衣拝領頂戴仕罷在候、其節御礼

申上候ニ付志摩様より御書被遣候写左之通

大屋九右衛門殿 荒志摩

24

今度時服被遣候、為御礼当地被参由^{ニ而}

先刻御入来塩蛸一器給令満足候

令他出不能面談候、将又過日^者磯竹

百合草并花入竹給令祝着候、恐々謹言

七月晦日

右之通御座候

一 私共祖父之者儀江府^江相詰候節^者
例月為御礼

25

太守様^江

御目見被為仰附候ニ付、其節御役人様より
被遣候御書付之写左之通

大谷九右衛門殿 河村彦十郎

蓮花寺五郎八

其元義明十五日四時

御目見被仰附候間可被出候、以上

十二月十四日

26



大谷九右衛門殿

河村彦十郎

蓮花寺五郎八

猶以五ツ時前御出可有之候、已上

以手紙令啓達候、明日

御目見被仰付候間、五時

御座敷^江可被罷出候、以上

四月十九日



大谷九右衛門殿

河村彦十郎

蓮花寺五郎八

27

追啓、御発駕之節

御門前^江被罷出候旨

勝手次第^与被仰出候間

例之通可被罷出候、以上

四月十九日

一

祖父九右衛門儀

御公儀^江御訴詔以後、尤

大廣院様御代、延享元年八月廿二日於

28

鳥府乍恐

御在国之節年頭

御目見之儀奉願候処達

御聴、則以御書附願之通被為

仰附候之旨、尤

大和様於御館御役人様より被

仰渡候趣如左



大谷九右衛門殿

牛尾金右衛門

上村惣右衛門

29

御用之儀有之候間

唯今

御館^江可被出候、以上

八月廿二日



大谷九右衛門殿

牛尾金右衛門

上村惣右衛門

追^而申入候此紙面

昨晚可遣之处、夜^ニ入

候故今日可遣候、何分

3
0

早御屋鋪^江可被出候、以上

八月廿三日

右之通御座候条、則御書附之写如左

其方儀御在国之節

年頭

御目見願之通被仰付候

子八月廿二日

右之通御座候

3
1

一 右本文書顯之通私共先祖之者^江

竹島渡海之儀被為仰付之次第先規より

書附之写左之通御座候、尤有増相送候

書之写^{ニ而}御座候、猶以委儀ハ此外相送候

書附所持仕罷在候

竹寫渡海之次第先規より之書付之写如左

貞享元二月

權現様以来之御勘状又^者御由緒之

3
2

御書有之候^者早速可相断之旨

御触之節私共先祖之者儀乍恐

台徳院様御代元和四年五月

阿倍四郎五郎様蒙御執持、則

松平新太郎様^江以

御奉書竹島渡海之儀被為

仰附候次第委細以書附相断之、尤相写

差出候所之右

3
3

御奉書之写如左

從伯耆国米子竹嶋^江

先年船相渡之由候、然^者

如其今度致渡海度之

段米子町人村川市兵衛

大谷甚吉申上付_而達

上聞候之處、不可有異儀之旨

被仰出候間被得其意

3
4

渡海之儀可被仰付候

恐々謹言

永井信濃守 在判

五月十六日 井上主計守 在判

土井大炊守 在判

酒井雅樂守 在判

松平新太郎殿

3
5

右之通御座候

一 台徳院様以来

御代々様_江

御目見被為仰付候節竹嶋蛇二箱

献上仕候、尤献上之為御殘

御老中様方御側御用人様方

若御年寄様方寺社御奉行様方_江も

進上仕候_ニ付

3
6

台徳院様御代御側御用人

松平右衛門太夫様より御書被成下候、ケ様之

類余夥所持仕候処、祖父共節違紛失

申候、尤相殘候写如左

一筆申入候、其地へ被参候_ニ付

串蛇三百入壱箱持参之由、留

主居之者共方より日光_江申越候

心付之通祝着申候、尚追_而

3
7

可申候間不具候、恐惶謹言

松平右衛門太夫

正綱

五月六日

追_而申入候

御目見之儀^者伊豆方へ

申入候、以上

大谷九右衛門殿

参

38

松平右衛門太夫

正綱

大谷九右衛門殿

宿所

今朝^者被相尋殊串匏五百入匏箱

預持参候、心付之通令祝着候、令他出

面談^下不能候、猶期面候、恐々謹言

八月十四日 正綱御書印

39

書状殊串海鼠匏箱三拾桁入贈給候

誠遠路心付之通令祝着候、尚追^而

可申候間不具候、恐々謹言

松平右衛門太夫

正綱御書印

極月廿四日

村川市兵衛殿

大屋惣右衛門殿

右之通御座候

40

台徳院様以来

御目見被為

仰付之節於

御城御役人様方より為心得被遊御渡候

御礼之次第書先祖之者共より每度之

御書附所持仕候处、享保三年戊十二月

廿七日之夜出火之節、裏長家居仕候^ニ付

類焼仕候^而先祖より之書付帳面等焼失

41

仕候、尤焼残り写如左

安倍四郎五郎様 酒井讃岐守

人々御中

忠勝

昨日^者伯耆之国町人大屋九右衛門私宅へ参^ニ付御使者被指添、右之九右衛門儀竹嶋へ船を渡候、此頃罷帰候、例

公方様^江御目見仕候由令得其意候

4 2

随^而貴殿儀炎天之節毎日御普請場^江

御出候儀御太儀存事^ニ候、何も期面上之節候恐惶謹言

八月十五日

八月五日御状忝披見、弥無事御入、就中竹嶋忝寫へ御越候船無恙過六月帰朝旨、旁以目出珍重御満足之段令察候

梅檀板義御取寄候処、難風付^而捨り申故

4 3

来春御申遣候半旨被入御念儀候、且又我等儀堅固有之候、猶期後音時候、恐惶謹言

大久保和泉守

十一月廿七日

正朝御書印

大屋九右衛門様

猶以御懇精之段

本望至候、以上

4 4

八月十五日御状令披見候、弥御無異候わん珍重此事候、且又我等儀無恙候、然^者兼^者所望之百合草根二十みちの膽十

并御所持之桐木沓本御廻、昨日着船過分

至候、委細紙面趣承知申候、両島^江

渡海之船無恙帰帆目出度御悦段

察入候、猶期後音之時候、恐々謹言

大久保和泉守

4 5

十二月三日

正朝御書印

大屋九右衛門様

村川市兵衛参府付^而御状并扇子沓箱

五本入贈給過分之至候、然^者御手前弥無為

由珍重此事候、且又我等儀堅固類中
無恙候間、可安御心随_而当春竹寫_江

渡海御申付候条、夏中可為帰帆旨、来春も
船御越之由令承知候、定_而首尾能候はん

46

存事候、内々申達候百合草海鹿之膽

参着候ハ、可給候、御当地御静謐之段

市兵可有物語候、猶期後喜之時候

恐々謹言

大久保和泉守

七月卅日

正朝御書印

大屋九右衛門様

正月八日別紙之御状令披見候、去冬、首尾能
公方様御目見へ難有被存候旨、尤候

47

我等儀も弥無事在之事候、来春竹寫へ

船被相渡候旨、無事着岸之左右可承候

材木之義兩人書状申達候次ニ重_而ハ子息

御目見ニ可被指越之由令承知候、一段

可然候、無氣遣御越可有之候、猶期

後音之時候、恐々謹言

阿倍四郎五郎

正月晦日

政重御書印

大屋九右衛門様

48

態一筆令申候、其筋別条無之各無事候哉

当御地御静謐吾等_茂父子共無恙有之候、

然_者御代替遠国之衆中也其方之様成ル

衆も何れも御目見致参府候間、相模守殿

御在江戸之事候間能時分ニ_而候、早々被致

参府可然候、相模守殿御屋敷より使可

有と存如此候、恐々謹言

阿倍四郎五郎

49

五月八日

大屋九右衛門様

卯月三日之来札披見、今度惣助罷下遂
面談候處、其方達者候得共眼病睨無之
重^而御当地へ参府難成候由申付、此度
元服為致、九右衛門^与名を改御老中へも
差越過廿八日首尾能致御目見候間
難有儀大慶可在之候、委細^者惣助

50

可為演說候、且又、下緒一具饋給之欣然之
至候、我等義も一段父子共無事在候間、可
御心安候、竹嶋へ之用事惣助ニ書付申
談候、猶期後音候、恐々謹言

阿倍四郎五郎

六月二日

政重御書印

大屋九右衛門様

御返報

51 (白紙)

52 (白紙)

53 (白紙)

54 (白紙)